

7.3 将来の予測

現状の旧河道環境に何らかの整備等を行わずに放置した場合、以下のようなことが予測される。

本川の河床の低下が減少あるいは停止した場合でも、旧河道の開放水面部は降雨等による土砂の流入により埋没、陸化し、乾燥化が進行する。

植物相は陸化による乾燥が進行するのに従い、ヨシ群落を中心とした抽水植物からオギ等の乾燥性草本群落となり、さらに洪水の攪乱が少ない場合にはハンノキ等の樹木が優占し、また高木化する。そのため最終的には高木の樹林地となる。

動物では、魚類等水生生物の生息環境が消失することとなる。そのため、開放水面を利用し、魚類等を採餌しているダイサギ、カワウ、クイナ、カワセミ等の水鳥が飛来しなくなり、草地化及び樹林化が進行すると、スズメやムクドリ等の草地性や森林性の鳥類が優占種となる。

よって、現在の水域から河畔林へ続く多様な生態系が、草地あるいは森林のみのものとなり、生物相としては貧相なものへと変遷する。

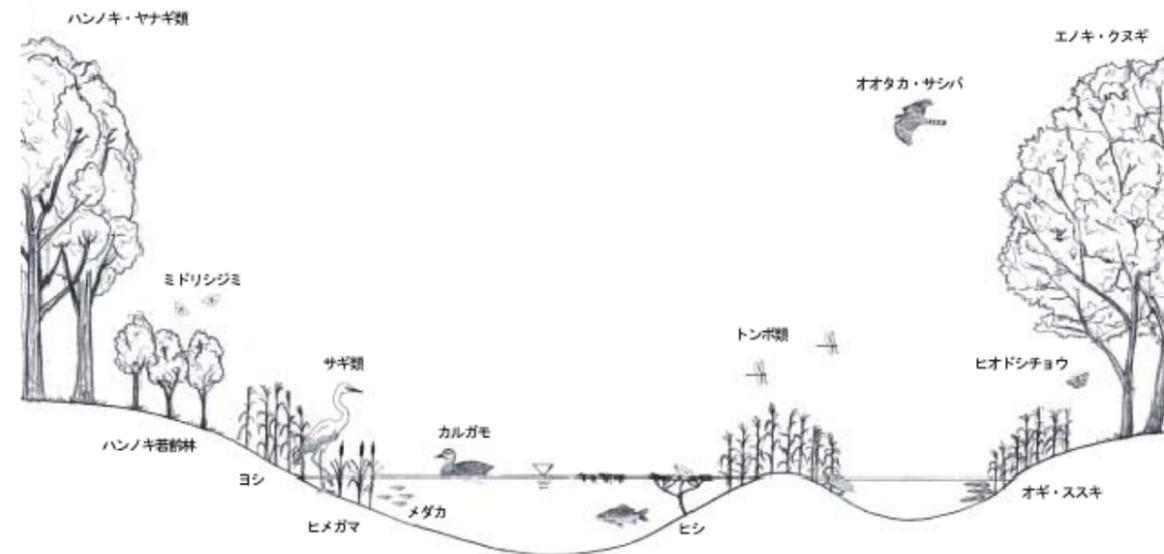


図-7.11 太郎右衛門自然再生地の特徴的自然環境のイメージ図

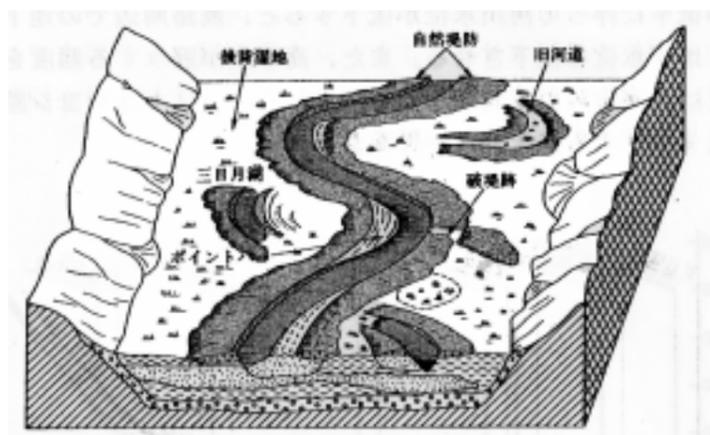
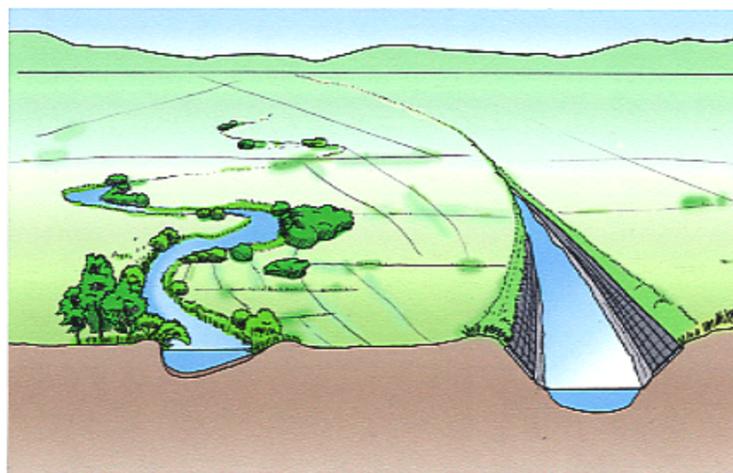


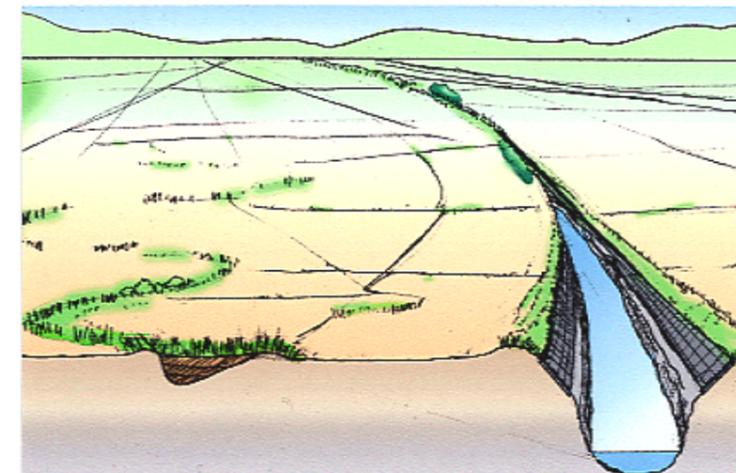
図-7.10 低地河川（自然堤防帯）の概念図

現在の荒川的环境



生態系ピラミッド(イメージ図)

事業を実施しない場合の環境



生態系ピラミッド(イメージ図)

自然堤防帯の低地河川では、河道筋が頻繁に変化することにより、三日月湖や後背湿地などの湿地環境を有し、これらは常に再生される。また、河道周辺の氾濫原は洪水の度に攪乱・更新される。

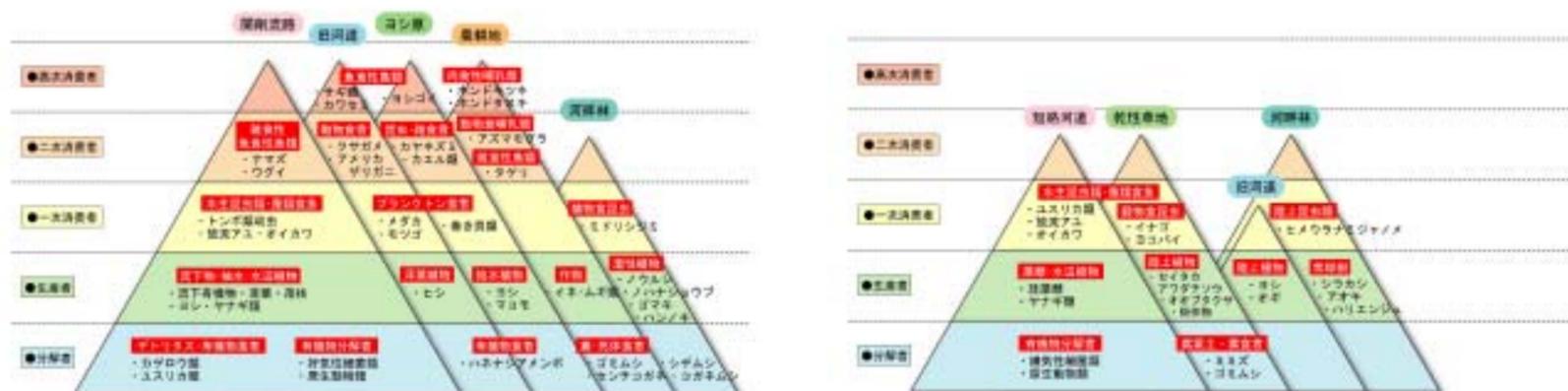


図-7.12 事業を実施しない場合に予測される環境の変化